

飯豊朝日連峰における登山道保全作業の官民協働活動について

井上 邦彦（NPO 法人 飯豊朝日を愛する会 副理事長、小国山岳会 会長）

【始めに】

第 11 回山のトイレを考えるフォーラム資料集に、「飯豊連峰における山岳トイレの現状と課題」と題して執筆させていただいた。その中で飯豊連峰の概要については掲載済である。

飯豊連峰の最も高い大日岳が 2,128m なのに対し、朝日連峰は大朝日岳が 1,870m とやや小柄である。共に日本海に平行して連なる第一線山塊なので類似点が多い。

私が所属する小国山岳会は山形県小国町をベースに活動している。小国町の最北端が大朝日岳、最南端が飯豊山である。小国山岳会が法人として活動するために設立した「特定非営利活動法人飯豊朝日を愛する会」は、小国町を囲むように接している飯豊連峰と朝日連峰から名づけたものである。

NPO 法人飯豊朝日を愛する会は、山麓の登山口にある天狗平ロッジの指定管理者、飯豊連峰の稜線にある梅花皮小屋（北股岳避難小屋）と御西小屋（御西岳避難小屋）の維持管理を受託していずれも夏の間は管理人を常駐させている。またオンベ松尾根とおういんの尾根の登山道刈り払いも受託しているし、小国町における遭難対策事業も受託している。ちなみに 2015 年における総事業費は 6,520 千円であった。

【登山道保全事業の始まり】

飯豊連峰と朝日連峰の主稜線は、磐梯朝日国立公園特別保護地区であると同時に、それぞれ飯豊山周辺森林生態系保護地域と朝日山地森林生態系保護地域の保存地区（コア）であり、保安林にも指定されている。

しかし飯豊連峰の最奥にあり縦走路の核心部である梅花皮小屋と御西小屋の間の登山道は、どこの市町村も責務を認めない行政の空白域となっている。

ここに位置する天狗ノ庭は池塘の点在する高山草原であり、古くから幕営適地として利用してきた。私が記憶するに 1975 年頃には既に、踏圧によって深刻なガリー侵食を受け、さらに幕営圧によって裸地化し大規模な植生の損失が進行していた。

また天狗ノ庭の前後は盛夏まで凍結した雪が残る急峻な登山道であり、滑落事故が懸念されていた。

当時の山小屋はし尿とゴミが溢れており、暴風時でもない限り中に入ることさえ躊躇される代物であった。そこで私達は自主的に小屋に常駐して小屋環境の改善を行うと共に、管理可能な小屋周辺以外の幕営を自粛するよう呼びかけた。長年の活動の結果、今では天狗ノ庭の幕営者は皆無になっている。

誰も手を付けない縦走路の刈り払いも、私達が自主的に行っていたが、天狗ノ庭の惨状

を見るにつけて心を痛めていた。

それより前に門内小屋と頬母木小屋を管理する黒川村が、残雪の多い風下側にあった登山道を頂稜に付け替えていた。これを通る度に状況確認していた私達は、天狗ノ庭付近こそ登山道を付け替えることが最善の方法と考えた。

灌木帯を切り開いて生じた笹や灌木を、紐で縛りガリー侵食の底に小さなダムのように据え付けた。伐開作業は数年続いたが、前年作成した小ダムはすぐに埋まるので、土砂の堆積地にまた小ダムを作った。

こうして侵食地の底は次第に上昇するとともに、侵食地の幅を拡大していた側面からの土砂崩れの動きが止まり、一気に植物が繁茂し始めた。

また侵食地から平坦地に変わった部分には、扇状地のように絶え間なく土砂が供給されてこぶし大の礫が重なっていたが、供給が弱まると同時に一斉に植物の萌芽が始まった。

この時期の私達の行動は記録をしていない、というより記録を避けている。ただ計画の概要を何度も所管の旧国立公園管理事務所宛に FAX で送った記憶はあるし、登山者からの通報を理由に環境省職員が現場確認を行ったこともある。

公園計画を読んで驚いたのは、計画にない山小屋や登山道が当たり前に存在していたことである。公園計画の見直しと言っても、それは現存するものの追認でしかなかった時代であった。

当時は登山者にとって自然公園法の公園計画は殆ど意味をなさないものと映っていた。であるから、耳に入ってくる登山道整備の多くが、法的な手続きを得ないで行われていたし、仮に手続きをしようとすればむしろ作業ができなくなると思われていた。

【保全連絡会】

2006 年環境省から飯豊連峰における登山道の意見交換会の案内が届いた。環境省が直接地元登山者の意見を聞くということは信じ難いことであったが、登山道整備を巡ってのトラブルを起こしたくないという気持ちから、積極的に現状を報告し保全のための具体的な提案を行った。

すると計画づくりの過程で、私達がこれまでやってきたこと、やろうとしていることを実証試験と称して実際に施工することになったのである。さらにはそのための技術講習会として巻機山で保全活動を行っていた松本清氏、石組み工法の福留脩文氏を招へいしてくれた。全くの我流で保全活動を行っていた私達は近自然工法という考え方方に胸を躍らせた。

2006 年 6 月から 7 月にかけて意見交換会を行い、9 月に選抜メンバーでワーキング委員会を発足させ、10 月には主稜線で実証試験、12 月に講習会を行うという、あれよあれよの進み具合であった。

「飯豊連峰保全計画書・登山道整備計画第一次(2007)」が完成した 2008 年 2 月、「飯豊連峰保全シンポジウム」を開催し、「飯豊連峰保全連絡会」が発足した。

保全連絡会には、置賜森林管理署・下越森林管理署・山形県・新潟県・福島県・関係市

町村・各登山団体の関係者が一同に会した。

幹事にはワーキング委員会で計画づくりに関わった登山団体のメンバーが就任した。それまで登山団体は県が異なることから交流はそれほどなかったのだが、1年余りの活動の中で連携が作られていた。事務局は民間が担うという考えもあったが、当面は羽黒自然保護官事務所に設置することとした。

飯豊連峰保全計画は、飯豊連峰を囲む地元登山者達が考えて作成したものであり、具体的な維持管理も自分達が担い、それが適正に行われるよう官公庁が支援するという構図が出来上がったのである。

【登山道保全の担い手】

活動に参加する登山者から常に注意を受けてきたのは「この活動が行政の下請けであつてはならない」ということである。

「登山道は公共施設であり、行政が責任を持って維持管理をすべきである。何故私達が行う必要があるのか」という疑問がつきまとっているのである。

保全計画の作成、実証試験、様々な保全技術の講習をとおして私達が出した答えは「行政のみに任せておいては、適切な管理ができない。地域の山岳関係者や登山者が参加・連携していこう」ということであった。

高山の植生は地形や地質、風衝、残雪、地温、水分などの様々な条件が絡み合った厳しい環境下で生育している。このため行政が行ってきた画一的で単年度を単位に進められる整備事業の多くでは効果的な成果が上がっていない。

常に山を歩いている登山者が環境保全に関わる理論・技術の講習会を受講した上で、ひとつひとつは小規模でローインパクトな保全作業を数多く行い、その施工結果を検証しながら、長く根気よくメンテナンスを行っていく方法が最も適していると考えたのである。

【飲み手伝い】

都市部から飯豊連峰に来る登山者には、山小屋に到着すると質素な食事をし、まだ明るいうちから寝袋に入る人が少なくない。それに対し私達は重い荷物を担いで登り、稜線の山小屋で盛大に飲食を楽しむことが多い。それは保全作業においても同じである。

始めて保全作業に参加した登山者は、山の中とは思えない豪勢な料理と飲みきれないアルコールに驚く。以前は会費制で食事を準備していたが、若い人達から負担がきついと意見が出て、現在は原則自分の飲食分を持参してもらうことにしている。それでも受け入れる側としては、最低限の鍋や乾杯用のビール程度は準備している。参加者にしても自分の分だけではなく、みんなに振る舞う分も持参してくるので、結局は大騒ぎになる。

私は以前から「パワーのある奴は荷物を担げ、金のある奴は金を出せ、コネのある奴はコネを活かせ、何もなければ飲み手伝いで良い」と言ってきたが、この飲み会こそが保全を続けてこれた原動力だと思っている。

保全連絡会には予算が全くない。仲間同士はネットで連絡をしているし、行政への案内経費などは事務局が負担してくれている。

資材の購入費については、最初は当 NPO の予算で購入をしていたが、森林管理署や自然保護官事務所、さらには山形県の外郭団体などが提供してくれるなどして、なんとか現在までやってきている。

天狗ノ庭と平行して保全作業を行ってきた梶川尾根上部の場合、登山口から稜線までの標高差は 1,500m ある。保全連絡会が設立され実証試験が本格的に動き出すと、保全資材は多くなってきた。日帰りで担ぎ上げ、さらに作業を行うことは次第に厳しくなっていった。

そこで小分けにした資材をビニール袋に入れ、登山口にある登山届出所に置き、作業箇所まで荷上げしてくれるようホームページに掲載した。私達の活動は隨時ホームページに載せているが、その趣旨に賛同した方々が我先にと荷上げを始め、私達は資材の梱包と補給に追われることとなった。

届出所には日時と氏名、荷上げした重量を記入する用紙を置いている。これを見ると保全作業経験者が多いが、見ず知らずの方もいる。各自がホームページで荷上げ状況を確認しながら、参加しているようである。

登山口から天狗ノ庭までのコースタイムは片道 13 時間である。山小屋は全て避難小屋である。自分の寝具や自炊用具の他に、土のうや緑化ネットなど保全作業の資材を担ぎ上げる必要がある。この時は、稜線の一番近い小屋までの荷上げと、小屋から現地までの横移動に分けて運んでいただいた。

当 NPO が山麓と稜線の山小屋の管理を受託していることは、保全作業を行う上で大きな利点となっている。荷上げされた資材の保管を始め様々な点で作業を支援することができている。

私達は稜線にある避難小屋に夏期のみ管理人を常駐させ清掃協力費をいただいている。保全作業に協力をしている山小屋は当 NPO が管理している小屋だけではない。具体的な管理体制は各市町村や受託者で異なるが、いずれも潤沢な財源とは言えない。

私達の保全作業はすぐに結果が出るものではない。各小屋で管理に関わる人達から理解を得るためにには、目に見える実績が出るまでの時間を要した。

避難小屋に泊まることのできる人数は少ない。作業は休日となるし、一般登山者も利用するのだから貸し切りにするわけにはいかない。過去には複数の小屋に分散して泊まったこともあるが、やはりみんなは一同に会したいという希望が強い。

ホームページで「この日は保全作業があるので大変混み合います」と周知を図り、さらに早く到着した登山者には、管理人が「隣の小屋に移動した方が快適ですよ」と勧め、少しでも混雑を緩和するように努めている。

【作業部会】

飯豊連峰保全連絡会や朝日連峰保全協議会で決定し、総力を上げて行う保全作業を「合同保全作業」と言っている。

参加者が 50 人にもなるのでどうしても数班に分かれることになり、その中の経験者がリーダーとなっている。

「振り返り」と称し、作業終了後は参加者全員を集めて、各班のリーダーが作業の狙いと手法を現場で説明し、助言者である川端さんと菊池先生がコメントを話し、必要に応じて手直しを行ってきた。

私達は、参加者を単なる作業員としては見ていない。みんなで現場を見て考え、作業方法を改善してきた。だからこそ参加者は飯豊連峰や朝日連峰に愛着を持ち、「私の山」として周囲の登山者に保全作業を解説し、自然の大切さを訴えるようになるのだろう。

石ダムを作るために登山道に散乱していた石を集めたところ、翌年の雨で一気に侵食が進んだこともあった。石ダムの弱点を補うものとして椰子纖維の使用が編み出された。小さな失敗と成功を繰り返しながら、保全作業の技術を作り上げてきた。

資材を自分達で担いで登り、ボランティアの力で行う保全作業が一度にできる作業量は限られている。前回の作業結果がどうであったか現地で評価を行い、効果のある方法を探ってきた。この PDCA の繰り返しが良い結果をもたらしていると考えている。

何年も作業を継続していると、幾つかの課題が上がってきた。一緒に登り始めても現地に到着する時刻は様々である。現況の評価を行い、大雑把な目論見で荷上げされた資材を使ったやり方をみんなで協議しながら作業をしてきた。

しかし相談や指示をしようにもメンバーが揃わない、作業に必要な道具を持った参加者がなかなか到着しないというトラブルも少なくなかった。その結果、どうしても手持ち無沙汰の参加者があえていた。

現場での効率の良い作業を求める声が強まってきた。また講習会を開くと参加者が多すぎて実践的な技術の習得が難しくなってきた。

そこで保全連絡会・保全協議会に関係なく、常連的に参加しているメンバーを集めて「技術部会」を立ち上げリーダーの養成を始めた。

さらに合同保全事業に先立って技術部会員が現地を訪れ、現況の評価を行い、撮影した画像にマジックで施工イメージを書き込み、必要な資材・工具・人員を積算し、これを基に荷上げ計画を作り、本番で部会員が各班を指揮するようにした。

現場では最初に各班のリーダーが施工イメージ図を見せながら、狙いとやり方を説明し、参加者と意見を交わし、場合によっては途中で設計を変更することもある。もちろん作業終了後は参加者全員で振り返りを行っている。これらの結果、これまでに倍する作業が可能になった。

大変に効果の上がった作業部会であるが、この方法は新たな問題も生じさせている。作業部会は年に 1 度 1 泊で会合（研修）を行っている。これに飯豊連峰で 1 泊 2 日の設計作

業、同じく 1 泊 2 日の合同保全作業、朝日連峰でも同様に 1 泊 2 日が 2 回。さらに全体会合が各平日にそれぞれ 2 回開催されるのである。

技術部会員はそれぞれが、登山団体に所属している一般の登山者であり、自分の休日を利用して登山を楽しんでいる。彼らは上記の会議や作業の他に、資材の荷上げも積極的に行っているが、こんなに日程が混んでくると、さすがの彼らも本来の登山を楽しむことができなくなるのである。

2015 年、始めて飯豊連峰における合同保全事業を見送り、朝日連峰でのみ実施した。これは 2016 年に再度天狗ノ庭で 2 泊 3 日の合同保全作業を実施するためであるが、同時に技術部会員の作業軽減を考慮したことである。

【最後に】

10 年前に保全計画書を作成する時に登山道の保全に的を絞って論議し、保全連絡会においても他の課題は避けてきた。さらにこれまでの活動においては、侵食や裸地の拡大防止を最優先させてきた。これは取り扱うテーマを拡大すると具体的な対策が困難になると判断したからである。

当然ながら飯豊連峰や朝日連峰を巡る問題は他にもある。たまたま朝日連峰以東小屋が老朽化により廃止の動きが出てきた。これに対し、この問題は以東小屋だけではなく飯豊朝日連峰の全ての山小屋に共通していると判断し、連絡会と協議会で対応を検討してきた。

昨年解体された以東小屋は幸いにも今年環境省により再建されることになり、関係者一同胸を撫で下ろしている。

しかし避難小屋はシェルターとしての位置づけがあるのだろう、水の便が考慮されていない。以東小屋も同様であり、トイレの問題が再燃している。

縦走が中心となる飯豊連峰や朝日連峰の主稜線の山小屋では、携帯トイレの導入は難しい。し尿処理方法は水の有無に大きく左右される。再建は水の問題とトイレの問題を再考する絶好の機会であるのだが、残念ながら位置を検討するには至っていない。

登山道保全における大きな障害であった借地問題については一応の方向性がでてきており、保全作業への追い風になっている。しかし登山道廃止の動きはあっても、より負荷が少なく安全な場所に登山道を移動することについては論議されていない。

登山道保全については、すぐに結果を求める単年度の公共事業ではなく、継続的な維持管理作業が必要であるが、行政予算のまな板に乗りにくいのが現状である。これは当地域だけの問題ではない。単発型から継続型への転換を、登山に関わる関係者が手を携えて要望していくことが大切だと考える。

登山道の維持補修を登山者自身が行うという私達のやり方は、10 年を過ぎた今も試行の連続であり、様々な面においてまだまだ不安定であるが、今年から施行される山の日の趣旨は「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」である。楽しむだけではなく、登山者が山に恩返しをする機会を作ることも重要だと考える。